



第37回卒業証書授与式が行われ、215名が本校を旅立ちました



暖かな陽気に包まれて、3月10日(金)卒業式が行われました。9年生215名が晴れ晴れと本校を巣立っていきました。卒業生一人一人にこの学び舎で過ごした3年間の思い出が走馬灯のようによみがえり、惜別と感謝に満ちた式となりました。9年生が河東中に残した業績は大きく、後輩たちへ歴史と伝統として受け継がれていくことでしょう。式後の卒業合唱の素晴らしさはその象徴ともいえるものでした。卒業生がこれからそれぞれの場所で、それぞれの世界で河東中で学び培ってきたものを発揮し活躍することを期待しています。

答辞に込められた卒業生代表・荒川巧成さんのメッセージ

春の暖かな日差しが感じられ、校庭の木々の芽もふくらむこの佳日に、私達215名は、卒業を迎えることとなりました。

3年前、新型コロナウイルスの影響で、私達は入学式を迎えることができませんでした。教科書を受け取りに学校に来たものの、その後は家庭学習をする日々で、この先どうなるのか不安でいっぱいだったことを覚えています。宿泊体験もなく、グローバルアリーナで行ったレクリエーションが唯一の校外学習でした。わずか一日の体験でしたが、新しい友達ができたり、みんなとジャンケン大会で盛り上がったりしたことは、良い思い出です。

2年生では、これだけは絶対実施されるようにと願っていた修学旅行が延期となり、そのときは本当に行けるのかと不安が募りました。文化祭の合唱は中止となり、練習も進めていただけに合唱リーダーの私としては、どう心の整理をすればよいのかわかりませんでした。しかし、先輩が卒部したあとの部活動や、生徒会活動をどのように活発化させるか、仲間とともに考えていくにつれ前向きな気持ちになることができました。

そうして、私達は最上級生となりました。すべての行事、出来事に「最後の」という言葉がついてしまうことに、一抹の寂しさも感じつつ、とにかく全力を尽くすことを念頭に組みました。

延期されていた修学旅行は一泊二日の熊本・長崎への旅へ形を変えて行われました。関西へ行けない残念な気持ちは正直ありましたが、この仲間と行けるといふ喜びの方が大きかったです。旅行後、しばらくは旅の楽しさが忘れられず、あの時に戻りたいと本気で考えていました。修学旅行に行かせていただいたことを、心から感謝します。

体育祭では、リーダーとしてブロック全体をまとめることの難しさと喜びを味わうことができました。総合優勝を目指して、誰一人として手を抜くことなく、全力で走り跳び踊り、励まし笑い泣き、すべてのシーンがかけがえのない思い出となりました。



文化祭では、初めて合唱コンクールを行うことができました。クラスで必死に練習し、少しずつ美しいハーモニーを奏できるようになると、指揮をしていた私の手にも力がみなぎってくるのを感じました。9年生の素晴らしい歌声を下級生や先生方に届けることができ、心からうれしかったです。河東中学校の新たな伝統のいしづえになったと思っています。

「受験は団体戦だ!」という言葉を抱き、私達は受験に向けて勉強を進めてきました。授業中や休み時間も友達同士で教え合ったり、先生方に積極的に質問したりして、それぞれが目指す目標に向かって努力してきました。勉強は苦しいですが、友達がいたから乗り越えることができました。これから私達は、別々の道に進んでいきますが、河東中で培った仲間を思いやる気持ちやあきらめない心を大切にすることをここに約束します。

後輩の皆さん、皆さんがいたから、私達に責任感が芽生え、たくさんの学校行事を成功させることができたと思っています。私達を「先輩」にしてくれてありがとう。先日の中庭コンサートも心が温まりました。生徒会の活動に、新たな風が吹いているのを感じています。これから先も皆さんらしく頑張ってください。期待しています。

そして、15年間ずっと見守ってくれたお父さんお母さん・家族のみんな、本当にありがとうございました。迷惑もたくさんかけましたが、心から感謝しています。大好きです。

本日、式の後に卒業の歌を歌います。その中に、「友、同じ空の下どこかで僕達は、いつもつながっている」という歌詞があります。9年生の皆さん、この歌のように私達はいつまでも仲間です。友達です。離れていてもつながっていると信じて、それぞれの道で頑張ってください。

テニス部・林愛莉さん、優秀クイーンズ賞受賞!

3月11・12日に博多の森公園テニス場で開催されたテニスのクイーンズカップ九州交流大会で、本校テニス部の林愛莉さんが優秀クイーンズ賞に選ばれました。この賞はテニスのプレーだけでなく、あいさつや礼儀、気づく力など大会期間中印象に残った優秀選手に授与されるものです。九州各地から参加した32校およそ700名の中から15名だけが選出される貴重な賞です。

柳は緑 花は紅 ~春の季節を感じながら生活しましょう~

この詩は、今からおよそ千年前に中国の宋の時代、蘇軾(そしやく)がよんだものです。この詩の解釈は古来様々になされてきました。私の解釈は、冬から春へと季節が変わり、陽光に包まれ何もかもが色めいてきている。そんな美しい春の景色の中で、改めて柳が青々とし花は赤く咲き誇り、それに息をのんだ蘇軾が簡潔に表現しようとしたのではないのでしょうか。当たり前のことをありがたい事実として実感することの大切さを蘇軾は伝えようとしたのではないのでしょうか。

蘇軾から百年後、中国で禅の勉強をして帰国した道元は、何を学んできたのかを聞かれてこう答えたそうです。「目は横に、鼻がたてについていることが本当にわかった」—ありのままのことが、当たり前のことが本当は恵まれていてありがたいことであると究極の感謝の気持ちを表現したのではないのでしょうか。大切なことは、あるがままの存在から、何かに気づいたり読み取ったりすることではないのでしょうか。

